



22世紀に皆さんはいませんか。 そのとき、子どもは 一人で生きていけそうですか？

入試は混乱していても
育む力の本質は変わらない

「大学入学共通テスト」の実施方法が揺らいでいることで、子どもたちよりも保護者の方々が敏感に反応していらつしやるように感じます。不安になったり戸惑われることもあるでしょう。しかし、教育改革の本質である、育成すべき資質・能力(10ページの図3)に変わりはありません。資質・能力の三本柱を育てる授業を受けていれば、子どもたちはテストの形式が変わっても対応していけると思えます。

私が心配しているのはテスト形式の変更よりも、「思考力・判断力・表現力等」と言われても、わが子は対応できないのでは？」という、育てるべき資質・能力が多様になっていること自体に諦めを感じている保護者の方々のお気持ちです。

保護者に諦めの気持ちが出てくると、子どもの進路を考えると、「行きたい大学」から「行ける大学」へと発想が変わってしまうからです。でも、わが子が充実した人生を送るには、子どもの意志・やりたいこと「WILL」が最優先されるべきですよ。

育むべき資質・能力に対応でき

「親はなくても子は育つ」
そうなる子どもに育てましょう



う意欲がわいてきます。

るか不安があるのであれば、今できること「CAN」からしっかりやってみよう。できることが100%できたら、すべきこと「MUST」に取り組み。すべきこととは、今できることよりも質や量を「歩進ませた段階のことや、苦手を克服することです。「CAN」と「MUST」を地道に積み上げていくことで、「WILL」にチャレンジしようとい

子どもがやりたいことに向かつてチャレンジし続けられる力は、保護者(家庭)と先生(学校)で一緒に育んでいくべきものです。三者面談では生徒と保護者が並んで先生と相對して座ることが多いですが、子どもをサポートする関係性は、子どもの「希望」を中心として、保護者と先生は子どもを支える

子どもがいなくて
私が生きていけないかも～



Profile

中村中学・高校(東京・私立)
キャリアコンサルタント(国家資格)
永井哲明先生

2002年、進路指導部長を担当した際、同校に「キャリアデザイン」の授業を導入。2010年から副校長、2016年から2020年まで校長を務め、2020年4月より現職。キャリア・カウンセラー、上級教育カウンセラーなど資格多数。



パートナーであることが望ましいの
です。

**子どもが幸せに生きるために
寄り添いながら自律を促す**

人生100年時代と言われ、子どもたちは22世紀まで生きる可能性が高い時代です。残念ながら私たち教員や保護者の皆さんが22世紀を迎えるのは難しいです。保護者の方々に「お子さまにどう育ってほしいですか？」と伺うと、近い将来の目標はさまざまですが、最終的には「自分たちがいなくなっても、わが子が一人で幸せに生きていってほしい」という声が多くの方々の共通の想いとして返ってきます。

「一人」というのは孤独という意味ではなく、保護者からの自律という事です。「幸せ」とは、独りよがりな幸せではなく、「人とうまくやっついてほしい」という願いが込められています。そのためには、誠実さをもって他者に貢献できる人にならなければなりません。社会人の姿として言い換えると「またこの人と一緒に仕事がしたい」と思ってもらえる姿です。皆さんが社会人としてそう感じる人とは、単に仕事のスキルが高いだけではなく、人間性も含まれていますよね。これからの時代に必要な資質・能力とは、実はそのことを言っているのだと私は思います。

つまり、保護者や先生がいなくなっても、自ら学んで成長したいと考える人材に子どもたちを育てなければなりません。

そのために保護者は、子どもたちの自律を促す必要があります。小・中学校の頃とは接し方を変えていくということです。その段階を示したのが図9です。

幼少期は子どもの前に立ちほだかる障害物を保護者が取り除いてあげていたかもしれませんが、成長とともに保護者の介入が少しずつ減っていき、手助けしていたのが手は出さずに見守る姿勢へ。最終的には保護者は先に死にますので、そのときに「自分がいなくてもわが子は大丈夫」と信じられるようになるのがゴールです。皆さんは今、どの段階にいますか？

**長所やプロセスをほめ、
自ら学びたい気持ちを育む**

子どもとどう関わっているかを保護者会で聞くと、子どもをほめていない方が結構いらっしゃいます。よかれと思って短所を指摘して直させようとしている人が多数を占めています。弱点の克服は大事ですが、保護者に指摘されるとやる気を失う結果に結びつきやすいのです。それよりも長所をほめると

**「転ばぬ先の杖」は
高校生にはもう必要ありません**



図9 子どもへの接し方の段階



達成感や自信につながり、学びの意欲がわきあがるものです。

図10のように、子どもへの声だけでやった方がいいのが「S3H」。「叱る」「ほめる」「育む」「はげます」です。「叱る」は「怒る」のとは違って、反省点があるときにだけ冷静に伝えること。「S3H」を保護者が心掛けることで、自ら伸びる子どもへと成長してきます。逆にやらない方がいいのが「S00K」。「責める」「怒る」「脅す」「キレる」。これでは子どもを萎縮させるだけで、やる気を促すことには結びつきません。

現代の保護者の方々は非常に多忙で、仕事で疲れて家庭でもつい愚痴を言いたくなることも多いと思います。家庭は保護者も弱音を吐ける場であるべきですが、高校生にもなると子どもたちはそうした保護者に対して気をつけて、「進路の相談をしたいけど、親も大変そうだから今度にしよう」などと遠慮していることもあるのです。

例えば保護者が愚痴ではなく、仕事で達成感を感じられた経験などポジティブなことを家庭で話せたら、子どもたちの人生観や職業観は前向きに変わる可能性を

子どもに失敗させたくない！
だからついつい
手をかけちゃう



図10 自ら伸びる子どもを育む保護者の言動



図11 子どもへの声かけ、対話のポイント

ポイント	期待される効果	例(○⇒良い例、×⇒悪い例)
プロセス評価	結果がどうであれ、次の目標に向かってがんばる力が伸びる	プロセスをほめる⇒○「あなたなら大丈夫」 *挫折してもまたがんばろうと考えられる *改善策を考えて繰り返しチャレンジできる
ポジティブアプローチ	過去と現在を意識して声をかけると効果的	過去を評価する⇒○「がんばったね」 現在を評価する⇒○「がんばってるね」 未来は本人に任せる⇒×「がんばってね」 *本人はわかってるのでウザイ
One Word禁止	文章として話すことで、思考力と表現力が伸びる	食事中の会話⇒×「(このおかず)ヤバイ」
意見を促す	物事に対する自分の考えが広がり、主体的思考力が伸びる	ニュースなどを見て⇒○「あなたならどう思う?」
チャンス対話	身構えない日常会話の中できっかけを提供すると、本音の話をしようになる	チャンス対話⇒○生活上で子どもが何かしたときに「それいいね」とほめる 計画対話⇒×「ちょっと座りなさい」と言ってから質問し始める *堅苦しい
子どもが先生	保護者がわからないことを素直に尋ねると、心を開くようになる	「あなたの方がスマホ詳しいから教えて」 ⇒「わからないときは素直に聞くことが大切だな」と心を開く

家族なんだから言わなくてもわかってると思ってた...



「親の背中を見て子は育つ」
疲れた親の背中でも育ちますか?



秘めています。「社会に出るってなんだか楽しいのかも」と子どもが感じるきっかけになるでしょう。しかし、わが子の長所にしても、仕事のことでも、良いことは意外と忘れてしまうもの。私は「良いことメモ」をおすすめしています。最初は良いことがあったときにメモを取ることをしているうちに、メモに書くために良いことをしようと思つて仕事をしようになつたり、子どもの長所も見つけやす

くふたりするからです。
ときには子どもから学ぶ
これからはそういう時代

子どもが何か話したような素振りを見せたときや、進路に関わる心情を打ち明けてきたときは、多少疲れていても耳を傾けて対話してあげてほしいです。子どもと対話するときのポイントを図11に挙げてみました。「プロセス評価」はとても大事で、

私も自分以外のすべてのものから学びたいと思っています



子どもたちに粘り強さを育んでいきます。「ポジティブアプローチ」は保護者が失敗しがちなところ。つい未来を意識して「がんばってね」と言いたくなりますが、がんばらなければならぬことは、本人が一番よくわかっています。プロセス評価にもつながりますが、がんばってきた過去や現在をほめてあげてください。会話が少ない家庭では「One Word禁止」運動をしてみてください。そのために食事中のスマホはぜひ禁止に。逆に会話が少い家庭では、ただ一緒にしゃべるのではなく、質問して「意見を促す」ことも主体的思考力を育むことにつながります。「チャンス対話」は学校現場でも効果的で、身構えずにポロツと本音が出てきます。そして「子どもが先生」になる場面はこの先増えていくと思います。変化が急激で保護者にもわからないことが多々あります。保護者自身も100年時代を生き抜くためには、「我以外皆我が師」の心で、ときに子どもにも教えるを請い、あらゆるものから学ぶ姿勢をもち続けられるといいですね。